

## 新しい酒は新しい皮袋に

——記念号発刊に寄せて——

学長 八 木 一 文

神戸女学院大学において、教育と研究に従事する教員の研究活動を援助、促進する機関としての研究所が発足したのは一九五四年（昭和二十九年）であり、その創設二十五周年に当って記念『論集』を発行することはわれわれ関係者一同の心から喜びとするところである。

神戸女学院大学はキリスト教主義に基く国際協調精神を重視し、その教学の根本をリベラル・エジュケーションに置くものである。そのルーツはアメリカ合衆国の北東部のいわゆるニュー・イングランドにある典型的リベラル・アーツ・カレッジであるアマースト大学、マウント・ホリヨーク大学などに淵源する。

大学の成立、発展の事情が欧米と異なるわが国において、リベラル・エジュケーションを遂行することは実に困難であるが、学部や学科の組織を日本の国情に順応させつつ、実質上の成果を挙げるための精神的基盤を培養し堅持しなければならない。

いわゆる「時代の要求」が全人的教育<sup>リベラル・エジュケーション</sup>よりも職業人養成への傾斜を促している今日、大学における研究の動向について一言申し添えたいことがある。

最近の学界の傾向として、学際的志向が数多く見られる。私自身も今日では生化学と呼ばれる学問領域に属する一分野を専攻す

るものであるが、生化学は生物学と化学との融合によって二十世紀の後半になって定着した学際的分野である。物理学と化学とはこれよりずっと早くから提携して物理化学や化学物理学となっているが、物理学と生物学とのむすびつきは永い間のためらいの後、最近二十年間に急速に具体化し、生物物理学と称せられるに至った。

自然科学におけるこのような学際化傾向にも増して、人文・社会科学の分野におけるそれは複雑多岐であり、これに自然科学が加入しての学際的研究分野が今日では社会的要請に促されて続々と登場している。環境科学、生命科学、人間科学などがそれである。

現代はまさに学際化時代とも言える。旧態依然たる学問体系を以てしては追求しえない新事態に直面して、この「新しい酒」を盛るべき「新しい皮袋」としての学際的思考態勢が要請されるのである。しかしながらこの際、大学人として厳に自戒すべきことがある。それは研究者個人が確立すべき研究上の立場である。立場の確乎たるアイデンティティの相互作用の上に学際的世界が成立すること、あたかも国際間の真の協調が当事国の主権や国益の尊重なくしては達成し得ないのに似ているからである。「曲学阿世」なる語を今一度見直す必要がある。